
リバレイション

裕樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバレイション

【Nコード】

N3072Q

【作者名】

裕樹

【あらすじ】

えすえふ学園の入試問題。それはたった一問の二択「あなたは死ぬ覚悟が来ていますか？」それだけだった。そこから始まった今までの生活とは一変した世界。そして新しい出会い。えすえふ学園は言わばギルドのような学校であった。

1話 えすえふ学園

1話 えすえふ学園

一ヶ月前にこんなことがあったな。それがすべての始まりだったんだな。

*

「あなたは死ぬ覚悟が出来てますかねえ」

俺の前には一枚のテスト用紙。そこには問題が一問しかなかった。しかも二択ではいいえのマークシート方式。

幼い頃に両親を失った俺は、中学3年間をなんとか無事に過ごしてきた。しかし高校からはお金がないため進学することが出来ない。つまりはフリーターまっしぐらになっちまうってわけだ。さてどうするかと思っていた時に救いの手が差し出された。

救いの手だったのだろうか？

高校の名前はえすえふ学園。これは正式名称であって、ひらがな表記されているのだ。

もちろん偏差値なんてデータはどこにもない。なんたってテスト問題がこれなのだから。
おとしげつきな

音重時南と名前を書き、俺はテスト用紙の質問のはいと言う欄に印をつける。その瞬間に周りの風景が一変した。

「だろうねえ。最初から変すぎるとは思ってたぜこの試験会場」

両親が死んで遺品などを整理していた時だった。何重にもある箱の中に手紙と一緒に赤い宝石が置かれていた。

そこに書かれていたものはほとんど試験問題と同じだった。

『死ぬ覚悟があるのなら、この玉を飲みなさい』

と。当時両親を失ったショックにより死んでもいいと思えてた俺はその玉を何のためらいもなく飲んだ。その結果がこれだ。

自分が解放したいと願うだけで武器を解放出来るようになった。手には二つの銃剣。軽くて使い勝手も良好。まさしく俺専用武器だ。今まではこんなの解放したら警察行きだから無駄に解放できなかったけど、俺が今度行く学校は、きつとこういうことなんだろう。

今までとは変わりきってしまった試験会場から声が聞こえてきた。「はあゝいこんにちは。あなたはこれから一匹の敵と戦ってもらいます。いわゆる実技試験ね。倒せばええふ学園にご招待。でも質問に答えてくれた通りここで死んじやう可能性もあるから気を付けてね」

録音か？などと思っていると、それを覆すかのように声が返ってきた。

「録音じゃありません。この部屋はテスト会場だから、思考内容もチェック出来るようにしてあるの。ちなみに私は試験会場案内役&試験管のヘルプ・リハートです。よろしくね」

年齢は20代前半くらい。ずいぶんと元気な口調だ。つとこんなことも向こうには伝わっているんだろう。そう思うと嫌な気しかなかった。

「わかったから、さっさと始めようぜ。こんな部屋に長時間いると無駄に精神力を使いそうだ」

「了解。じゃあ敵転送。一応もう一回忠告するけど、これはシュミレーションじゃありません。ほんとに死ぬこともあるからね？」

わかってる。と心の中で言った。

「了解」

やっぱりテレパシーかなにかで伝わっているのだろう。

目の前にはクマみたいな奴が現れた。いやどー見てもクマだ。しかも目が赤く光っている。

「はいじゃあスタート」

戦闘が開始された。クマは猛スピードで突進してくる。

「うおっ、マジ？ちよつと早っ」

あくまで俺は人間だ。瞬間移動とかジャンプでかわすなんて偉業技は出来ない。だっさいけど走ってかわすしかないんだ。

こーゆー場合は先手必勝だよな。

俺は両手の銃剣から銃弾を発射した。俺の銃剣は双方違うタイプで出来ている。左手は小指で銃弾を発射するタイプ。つまりはナイフ感覚で接近戦で力を発揮する。右手の方は人差し指で銃弾を発射するタイプで拳銃感覚で攻撃をする。刃はしたの方にあり、忍者とかのクナイとかそんな感じの攻撃方法なのだろうか？

とりあえず俺はクマめがけて銃弾を発射した。

弾はクマの腹部にヒットした。俺の命中率もそこそのもんだ。腹部から血が流れ始めている。

「効いてる」

しかし、あろうことかクマは突進してきた。腹部には銃弾が4発確実に命中している。なんで倒れねえんだ？普通のクマだったら狩られているだろ。

俺はまただっさい走りで突進をかわす。

銃弾こそ設定上は無限だが、なんだか知らないけど銃をチャージするのに体力を使っている・・・ような気がする。

とりあえず俺は銃弾を発射。さらに腹部や手にヒットする。がまだ倒れない。

なんでだ？普通死んでるだろこいつ？一向にクマは倒れない。

考える俺？これは技術試験。突然現れたクマ。普通のクマだ。普通だったら4発当てれば死にそうなクマだがそれ以上当てても死なない。この部屋に仕掛けはない。

「そうか！」

俺は銃剣に弾を2発チャージした。

その間にもクマは突っ込んでくる。しかしそれがチャンスだった

んだ。

「普通のクマだったらもう死んでるはずだ。だけど死なないってことは普通じゃないところが弱点なんだよなあ！」

赤く光っている目に向けて銃弾を発射した。ターゲットが小さくて当てづらいのだが、こつそり練習してたことがある。問題なく両目にヒットした。

正直これで死ななきゃかわせないから死ぬだろうな。まあいいや俺だって死ぬ覚悟はとっくの昔にできてらあ。

クマは目の前に倒れこんだ。そして目の前から消えた。

「ごーかあーくっ」

すげえ元気な声が聞こえてきた。

「はいよく出来ました。じゃあ一ヶ月後くらいに紹介状贈るから準備しておいてね。じゃあ今日はもう帰ってもいいよー」

声が終わると景色は元に戻った。いつもの風景だ。

*

目の前にはすげえありえない扉。なんか魔法空間って言うのはこういうことを言うんだだろうな。

「入って入って」

この世界に未練はないだろうか。多分戻ってくることは出来ないんだろうな。まあ友達だっていないし家族もいない。俺一人がいなくなっただけで誰かが悲しむ世界じゃないか。

俺は異質な扉に脚を踏み入れた。

その先は、一つの部屋だった。

「はあーい、えすえふ学園にようこそ。私はあなたの先輩であり師匠でもあるヘルア・リハートです。これからよろしくね」

「はあ？何？はあ？」

目の前には一人の女性。やっぱり歳は20代前半くらいで黄色い髪の毛。鮮やかな髪だ。クリーム色とか金髪じゃなくて本当に黄色

の髪。それを後ろでしばって少し持ち上げているポニーテールだ。そして瞳の色は黄色。完全に別世界の人間だった。

「はあ？じゃないでしょ。一回会話したことあるでしょ。もう忘れちゃったの」

「いやいや覚えていますよ、試験管の人でしょ。俺は何でこうなっているのが分からなくて」

「それを今私が教えてあげようってことですよ」

それから、なんだっけ？そうそうヘルアさんが長々と説明をし始める。

「まずこの学園システムは騎士団とかそういった類のものだと思ってもらっていていいわ。一応授業見たな物はあるんだけど、そんなものは週に2回だけ。この世界で言う土曜日と日曜日に勉強があるわね」

うわっ、めっさ逆じゃん。

「ほとんどは武器の解放。まあバレイションした武器の特訓を行うことが本業だと思ってね。それで一応あなたもクラス分けがされてあって今度の日曜日にランキング戦があるのよ」

「ラン？キング？セン？」

「あらすごい片言ね。そうランキング戦。特別なフィールドが用意されていてそこで戦闘してもらうの。どちらかが先頭不能になるまで戦ってもらうわ」

「それって死ぬんじゃない？」

「だから特別フィールド。簡単に言うと、なぜか痛みだけは体に残るけど傷はあつという間に回復。気絶したら負けっていうルールなの」

もうなんでもありって感じだな。

「ということで、私が時南君の師匠ヘルアです。よろしくね」

「だからっ！なんで試験管のアンタがそのまま師匠やってんだって」

「あら、試験管なんて最初から設定されてないわよ。実技試験者

が現れるたびに、この世界の一人が試験管役として選ばれるわけ。それでそのまま師匠を務めることになるのよ」

「なるほど。ものすごいスピードで理解できたぜ」

「そりやどうも」

とりあえずここが俺の住む場所になるらしい。そしてこの人、ヘルアさんが俺の師匠となるらしい。そんなもって俺は日曜にあるランキング戦とやらに出て目標は優勝。ということだ。

「じゃあさっそく始めましょうか。リバレイション」

ヘルアさんの片手から、一本の普通の剣が出てくる。

「普通だな」

「うるさいわねっ。普通が一番なの」

「でもどうすんだ？ここじゃ傷は回復しないんだろ？俺また命の危機ってやつかい」

「まあここで戦うのは冗談。普段は素振りやシュミレーション形式の実践ってところね。それにいきなり私と勝負したって、時南君じゃ勝てないよう？」

イラッとする言い方だったので少しむかついた。それにヘルアさんの実力もまだまったくわかってないのだ。

「でもあなたの武器は珍しいわね。銃剣なんてなかなか使う人はいないわ。便利ではあるんだけどね。それにあなたのはさらに特別。双方の形が違うんだもの。扱いづらいでしょ？」

「そうでもないっすよ」

何回も練習しましたから、なんて言えないよなあー。

「まあいいわ。ささっランキング戦に向けてまずは身体能力の強化よ。時南君にはこれから三日ほどで攻撃をかわせるくらいまで上達してもらっわ」

「ななな、何を？つまりアニメみたいに銃弾かわせてことですか？」

何を言ってるんだろこの人は？前から思っていたことだけでも言っことをすることがむちゃくちゃ過ぎるような気がする。

「そうよ」

あつさり肯定したし

「じゃあヘルアさんは銃弾かわせるんですか？」

「不意打ちとかじゃなかったらかわせるわよ」

「ただけすごいんだよ。」

「それにクラスのみんだってそれくらいは出来るはずよ」

俺がすごくないだけだったらしい。そう考えると俺は今ランキング予想ではビリと言うことになっているのか。

と言うことで俺とヘルアさんの二人で身体能力教科トレーニングを黙々とし続けた。

初日目から体が悲鳴を上げてギブアップしそうになった。いやしようにしたんだけどあの人が無理やりにも始めるもんだから、ここで死ぬんじゃないかって思った。

*

「はいよく出来ました」

何だかんだで俺はそのトレーニングをやりきった。自覚はないがそれでも成長しているんだろう。なんか身のこなしが良くなった気がする。

「よく頑張ったぞ時南君」

ヘルアさんが、缶ジュースを投げた。俺はそれをキャッチする。

『おしるこ青汁』

缶にはでかい文字でそう書かれている。

「なんでこんな不味そうなもん買ってくるんですか？」

・・・自分はオレンジジュース飲んでるし。

「健康によさそうよ」

「はあー」

俺は缶を開ける。そして以上にどろっとしている半液体状の物を飲み込んだ。

やっぱり不味い。

「そんな嫌そうな顔しないの。まあとりあえず明後日がランキング戦ね、時南君結構センスあるし結構いい所までいけると思うの。頑張って」

こぶしをぐっと握って突き出してくる。

俺も同じポーズを取った。

明後日に備えて眠ることにした。

1話 えすえふ学園（後書き）

どーもです。

2作同時進行という形になります。こういつのも書いてみたかったんですね。

更新速度はゆっくりですがよろしくお願いします。

これは最初からフラグが立ってますが、回収してしまう時がいつか来るのだからなと作者自身感じています。
それでもよろしく願います。

2話 こんな地味でも魔法少女

『では第一学年A組のランキング戦を始めます』

よくよく聞かされると、この学校には授業と言つものがほとんどない。土日のみが授業を受ける日となっており、それ以外は自由に行動していいそうだ。

けどこの学校はさまざまな以来を受けているそうで、それを生徒に行わせているらしい。それを行うのが自由の5日間ってことになる。

また以来をする時には自由に人を誘ってパーティーを組むことが出来るらしい。もちろんそれは人気が高い生徒であつたりランキングが高い生徒の方が誘われやすい。また以来を達成すれば報酬があるらしい。

いかにもうさんくさいRPGゲーム設定だけどそう決まってるんだから仕方ない。まったく誰がこんなシステムを考えたんだか。考えた奴に出会ったら思いっきり笑ってやるぜ。

食事は寮なので学食がある。ただお金は必要となる。またお金がない者が出てくる可能性があるため食事は無料で支給されるようになっていいるらしい。

でもそれってニートってことだよな・・・

とりあえずそんなこんなで、ニート生活にならないためにも、このランキング戦はかなり重要なイベントになるってわけだ。

『では、OOさんとOOさんはルームへどうぞ』

俺達は今別の部屋に待機させられている状態だ。結構広い部屋で、中央付近には戦闘フィールドを写している巨大モニターがおいである。

今そこに二人の生徒が登場した。

一回戦。つまりここで負ければランク過半数より下は当然ってことだ。それだけは避けたいな。

「では、開始っ」

大きなリングの音が鳴り響き戦闘が開始された。二人ともリブレイションとか言って、自分の武器を解放し始める。

俺は恥ずかしいから絶対言わない。無言で解放してやる。

「おおっ」

周りの数人に見られてしまった。一人の武器はどう見てもナイフ。指と指の間に合計8本のナイフを構えて戦闘態勢を取っている。

もう一人は、説明しにくい武器だ。鎖の先に鉄球が付いている。

すごくシユールだ。でも違う。

ナイフを持った人が四本ナイフを投げる。スピードもなかなかのものだし、あのまま進んでいけば4本とも体に命中する。ずいぶんと使い慣れているように見えた。

しかし鉄球野郎はその鉄球で四本のナイフをはじき落とした。ずいぶん重そうに見えるが軽がる動かししている。そしてそのまま鉄球を相手に投げた。

スピードもそこそこ、でもかわせないスピードじゃない。

「えっ」

しかしナイフ装備の人は、それをかわすことなく、もろに腹部にヒットした。そのまま後ろに吹き飛ばされて壁に叩きつけられた。

まったく外傷は追ってないが、ものすごく痛そうな顔をしている。呼吸が出来ないのか苦しそうな表情さえ伺える。だがまだ気絶はしていない。

つまり現実ではまだ死んでいないということだろう。

ジャラジャラ

鉄球が引きずられていく。

ん？

「な、なんだありゃー」

と俺は小さい声で呟いた。

鉄球野浪は鎖についているレバーみたいなものをぐるぐる巻いて鉄球を引き戻しているのだ。

ダサい。そして戻すスピードがすげえ遅い。

ナイフ装備の人はその間に呼吸を止めて、残っているナイフ4本の内日本を投げつけた。そのナイフは一直線に進んでいき、レバーを回している手と反対側の手に刺さった。

上手い、これならレバーを回せなくなる。鉄球を失ったからには奴はもう隙だらけということになった。

ナイフを持った人は、そのままナイフを雑に握った。そうよくドラムで人を殺すかの様な握りで。そのまま相手に向かって走りこみ、心臓部分めがけてナイフを突き出した。

鉄球野郎は逃げ出そうとしたようだが、手が鉄球を握ったままだったのでかわせなかったようだ。見事心臓部分に突き刺さったナイフは、抜き取られ、鉄球野郎は気絶した。

そして試合終了のゴング

あーあ、あいつももうランク下位だぞ。

そして気絶した鉄球野郎はどこからか来た二人に抱えられてランキング戦を後にした。

このような感じで一回戦が終了した。俺の番まではまだかなり残っているので試合を十分に観戦することが出来るのだが、思ったよりレベルが・・・低い気がするぜ。

鉄球もかわしていないし、ナイフの時だって簡単にやられてたし、でもナイフのスピードとか命中率は結構なものだったし・・・ん、よくわからん。

とりあえず俺は自分の番まで待つことにした。

*

『決勝戦』

やっぱりだった。

みんな弱すぎる。

今まで決勝まで銃弾一発打ち込んだだけで、相手はかわすことなく気絶していった。かわさなかったんじゃないかってかわせなかったんだと思うが。

あの俺の、血と涙の特訓は何だったんだ？馬鹿みたいじゃないか？でもこれでランキング2位以内はもらったようなもんだ。

俺は決勝戦へと向かった。

「ふゝん？あなたが決勝戦の相手？見ない顔だけど本当に戦ったの？八百長とかじゃないの？」

「失礼な奴だな」

俺の戦闘時間が3秒だったから目に付いてないだけだよ。まあ相手にプレッシャーを与える意味でも言っておけば良かったが、目の前の女の子もずいぶんと自信に満ちた顔をしていたので言う気がなくなつた。

「お前は楽しませてくれんの？」

その代わりと言つてはなんだが、挑発を試みた。

「ええー？それはこっちのセリフなんだけど」

逆に挑発し返された！？まあ別に俺は短気じゃないからそんなことじゃ我を見失つたりはしない。

目の前の女の子は鮮やかなピンク色でショートカットの髪をしており、身長は小さめ。それ以外はスタンダードすぎる可愛い美少女だ。

「大体アンタの武器レベルいくつ？」

「は？レベル？」

ヘルアさんからもらった聞いたことのない単語が聞こえてきた。「何？レベル知らないで参加してたの？アンタの師匠どうかしてるんじゃないの？」

・・・否定は出来ない部分がある。

「しょうがないから教えてあげるわ。私達はリバレイションすること個人を武器を解放して戦う。その解放する武器にはレベルが

あつて、どんな種類でも1〜10までのレベルがあるの。レベルの上がり方はよくは分かってないけどレベルが上がれば武器の姿が変わったり、新しい事が出来たりとさまざまなことがあるわ。それでアタシはレベル3。これは高等部2年レベルなのよ。どう？アタシがすごいのか？

ベラベラと長い説明をしてくれた。だが、おかげでレベルのことについては良く分かった。多分ヘルアさんの言い忘れたと思うので後で聞いてみることにしよう。

「おーおー、とりあえずお前がすごいってのは分かった。まあ始めようぜ」

「いいわよ。すぐに終わらせてあげるわ」

試合開始のゴングが鳴った。それと同時に武器を解放した。

俺はいつもどおり拳銃の銃弾一発を発射した。

「これで終わんねーかな」

実際終わんなかった。銃弾は少女の前で静止し、そのまま床に落ちた。

「アンタ危ないことしてくるね？」

少女の手にはステッキのようなものが握られている。

どうみても・・・

「私の武器は魔法の杖よ」

魔法少女だった・・・

ただ変わっているのはステッキを持ったという所だけで、服装はまったく変わっていないので地味すぎる魔法少女だった。

「地味だな」

「うるさいわねっ！」

やっぱり気にしているらしい。

「やっぱ今までどおりにはいかないつてわけね」

「さっきのはプロテクロね。レベル2で習得できるのよ」

「そんな知らん！」

「何よ！それにアンタの武器は何？変な形してるわね。そっから

銃弾が出るなんて思いもしなかったわ」

思いつきり拳銃の形をしているのに銃弾が出てくると思わない神経もどうかしていると思うのは不自然なことなのだろうか？

「まあいいわ。あなた面白いわね。名前は？」

「音重時南」

「ふ〜ん時南くんね」

「そういうお前は？」

「私は、イリー・ローキユル。イリーでいいわ」

そっか、ここは日本じゃなかったな。

いきなり出てきた外国の名前に驚いてしまった。

「まあ始めましょ」

イリーはステッキを魔法少女のように足と足の間に挟みこんで空に浮かんだ。いや魔法少女なのだけど。

俺はすかさず銃弾を発射するが、先ほどと同じように銃弾はプロテクトで防御され無効化されてしまう。

遂にイリーも反撃に出たのか、空中から急降下して突っ込んできた。結構スピードがあるがかわせないほどのスピードじゃない。

俺は引き付けてから横っ飛びしてかわすことにした。

実際にやったことがないが、俺は銃弾すらかわせる身体能力を持っているらしい。これくらいは余裕だ。

「時南くんなかなかやるのね？」

イリーは少し驚いた表情をした。

「俺も無駄に決勝まで勝ち残ってないからね」

「そう？でもめんどくさいからちやちやと終わらせちゃいましよっか」

イリーはめいいっぱい上昇して何やら力を蓄え始めた。

「な、なんだアレは？」

ステッキの先から、光る球状の物体が膨らんでくる。そしてその大きさはどんどん大きくなっていった。

「これは、魔法少女お決まりのビームって所かぁ？」

「その通り」

イリーは俺の呟きにウインクをしながら答えた。その間にもほとんどとレーザーは大きくなっていく。

「どうする？降参する？今ならとめてもいいけど？」

もう光はイリーの体を包み込んでおり、聞こえてくる声だけで姿は確認できない。

「ふうー」

俺はため息混じりに息を吐き出した。

「いや。降参はしない」

いつだっただろう。この武器が手に入った時、もつとないか出来ないかと思つて強く願つていたらこの武器は、そう進化した。

そうただ願うだけでいい。

俺の武器は進化する。これがレベルと関係してるのかもしれない。拳銃部分の発射口がピラミッド型になり、三連射。またはあのようにレーザーを打つことが出来る。アレと勝負して勝てるかどうかは分からないが、あのでかさをい見る限りかわすスペースはない。一か八かにかけるしか方法はなかった。

俺も拳銃部分に力を込めてレーザーを準備する。

向こうは白。こっちは紫色の鮮やかなレーザーだ。ピラミッドの中心部分にレーザーが集中する。こっちも準備万端だ。

「そろそろ行くわよ」

「望むところだ」

「っいつけえ」

同時のタイミングでレーザーを発射。白と紫のレーザーは互いにぶつかり合い押し合つてゐる。後は出力の問題だ。

「俺はかあつ」

刹那

俺の放ったレーザーがイリーのレーザーを打ち消して、紫色のレーザーがイリーの体を包み込んだ。

「うおおおっ」

レーザーの衝撃が強かったのか、放った方向も悪かったのか、俺のレーザーはモニターに写すはずのカメラをぶっ壊してしまった。また壁の一部が損傷した。

そして試合終了のゴング。

『決着』

そこには気絶しているイリーの姿が。相変わらず外傷はない。どうやら俺は勝ったみたいだ。優勝だ。

『機器及びフィールド破壊により音重時南失格！優勝イリー・ロークュル』

「はあああ〜？」

俺はひざを付いてうなだれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072q/>

リバレイション

2011年1月26日02時53分発行